
クリスタルな私たち

ぷいよ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリスタルな私たち

【Nコード】

N1473T

【作者名】

ぷによ

【あらすじ】

麻奈美は玄関で太田を迎えた。彼がこの家に来るのは初めてだった。

車の音に気付いた麻奈美が外へ出てみると、彼の姿が見当たらなかった。おかしいな、と首を傾げていると、どうやら建物をぐるりと一周して来たらしい太田が笑いながらひよっこり顔を出した。

「いらつしゃい。入って」

内心冷や汗が出る思いだったが、扉を大きく開いた麻奈美はこやかに彼を玄関に迎え入れた。

この家は新築でこそないが、まだ建てられて間もない平屋の一軒家で、駅からは少し離れているものの車があれば不自由する事もない。そして歩いて行ける距離にはスーパーもあり、散歩がてら買い物に行く事も出来る、便利な立地にあった。

太田は休日なのにスーツを着込んでいた。きっと奥さんを誤魔化す為に仕事をいいわけに使ったに違いない。そしてそういう所は敢えてつつこまないのが、愛人としての節度という物だ。

「元気だった？」わざわざ買ってきてくれたらしい麻奈美の好きなケーキを手渡ししながら、彼が言った。

「ありがとう」麻奈美は礼を言ってそれを受け取ると、急いでスリッパを揃えた。彼は物珍しそうに室内を見渡ししながら、「もう大分慣れた？」と訊いてきた。

「ええ、あちこち近所を探検してる所……」

引越して十日余り。彼が来るのに備えて、必死に荷物を紐解いたので、見た目はどこも綺麗に片付いている、……ように見える。実はまだ周辺を散策する余裕などなかった。

リビングに案内しようとする、彼は、「ちょっと見ていい？」と廊下の扉を指差した。

「どうぞ。でもそこは洗面所よ？」

苦笑しながら、お好きなように、と扉を開けた。

お金は彼が出してくれたのだし、これからちよくちよく訪れる事

になる彼の希望を容れて、少しくらい手を加える事になっても、麻奈美に文句など言えるはずもない。

脱衣所兼洗面所と奥にある風呂場を見て回った太田は、廊下の麻奈美へ顔を覗かせた。

「なんでバスと脱衣所の間の壁が透明なんだい？ これじゃ丸見えじゃないか」

「やっぱりそこを突いてきたか……」。

「刺激的でいいしょ？ あなたが先に出ても、あなたが後から来ても。ね？」

麻奈美は小さく笑った。頭の中でその場面を想像したのか、彼は、「そうだね」とすぐに納得した様子だ。

そのまま彼が廊下へ出ようとした時、洗面所でガタッと音がした。彼が振り向くと、床に歯ブラシが落ちていた。しかもゆらゆらとハンドタオルが揺らめいている。

青ざめた麻奈美は、何か言おうとした彼の横を突っ切って歯ブラシを元に戻すと、関心を他へ逸らせようと、急いで太田の腕を取って扉を閉めた。

突き当たりはリビングだ。ドアを開けて中に入ると、十畳程の部屋の正面はやはり全てが透明な材質で出来ており、海が一望出来る。高台に立つこの家からは、まさに庭が海そのものに見えた。

「どう？　すごい眺めでしょう？」

季節によつては風が強いのが玉にキズだが、その時は洗濯物は乾燥機で乾かせばいいし、窓を閉めておけば、この素晴らしい風景を一年中眺める事が出来る。

ふたりで並んで外を見ると、風もなく穏やかな今日は、緑掛った青色の海に日射しがキラキラと反射してとても綺麗だった。

「確かに絶景だね。だけど外から見えるのは防犯上良くないんじゃないかな？」

「大丈夫よ。材質はなんとかっていう強い物らしいし。ほら、ちゃ

んとブラインドだって備わってるでしょ？」

麻奈美はこの眺望が気に入って、この家を選んだような物だった。なので、それを否定されてしまうのは、少し悲しい。

「実は寝室も同じようになってるんだけど……」

驚いた彼が、こちらを向いた。

リビングはダイニングと一体で、脇に対話型キッチンが並んでいる。ちょうどその反対側に寝室はあった。

一度廊下に出てから、ふたりは隣りにある明るい寝室に足を踏み入れた。キングサイズの大きなベッドが、でんと部屋を占領している。これならいくら激しく動いても、落ちる事はなさそうだ。そしてその向こうには、やはり海が広がっていた。

「本当だ。これじゃ、麻奈美と抱き合ってたら、外から見られちゃうな」

麻奈美の腰に手を回しながら、太田が自嘲気味に言った。

なるほど、そういう事か……。ようするに外からいちやいちやる所を目撃されでもしたら大変だ、と思っっているのだ。少なくとも寝室でそれは杞憂だろうと思いつつ、女である自分の方が気にすべき事を彼が話すのがおかしくて、麻奈美は口元に笑みを浮かべた。でも同時にそんな彼をかわいと思う自分もいるのだ。

「ばかね」麻奈美はそう言っただけに彼に寄り添うと、彼の胸に手を添えた。

彼はとある会社の社長の息子で、つまりいい所のおぼっちゃんだ。しかも麻奈美より二つ年下の彼は若くして、早くも役員待遇で修行中の身。既に顔は見た事はないが妻がいて、彼曰く、親の決めた相手と、半ば強引に結婚させられたのだという。

昔聞いた話によれば、今でこそ会社は順風満帆らしいが、その当時は危機的状况で、いわば金目当ての政略結婚だったらしい。それが嘘か本当かは分からないが、何か時代錯誤掛っているの、麻奈美は話し半分として頭に入れてあった。

でもそんな事はどうでもよかった。彼はいつも優しく、おまけにお金もある。何より麻奈美を愛してくれているのだから……。ただそれを守る為に、麻奈美はちよっぴり嘘をついていた。

「前は海しかないし、防音もばっちりだから昼間からでも大丈夫……」

そう彼の耳元で囁くと、腰にあった手が麻奈美の身体をまさぐり始めた。

「ちよっと待って」洗面所の事を思い出した麻奈美がその手を押し留めようとした時、突然彼の携帯が鳴り始めた。

「もしもし？ 葵さんなんなの？ 休日なのに……」

少し離れて電話に出た彼は、明らかに不機嫌そうな声で応えた。葵さんというのは太田の秘書だ。おまけに、兼見張り役らしい。

急に声を潜めて早口になった彼の様子から、何やら緊急事態発生の予感がした。

そのまま長々と話し始めた彼に、麻奈美はお茶でも用意しようとしてキッチンへ足を向けた。

そして廊下へ出た所で、ひたひたと近付いて来る音を耳にして立ち止まった麻奈美の服が、下向きにぐっと引つ張られた。

「やっぱり……。再び青ざめた麻奈美はそつと下を見た。どうしようかと迷った拳句、取り敢えずキッチンへ行こうと、後ろを確かめた。」

そこへふらふらと現れた彼に、麻奈美は危うく悲鳴を上げるそうになった。

しかし心底がっかりした声で、「戻らなくちゃいけなくなった」と告げた彼は、そんな美奈子の様子に気付かなかったらしく、手に持っていた携帯を胸ポケットに乱暴に仕舞った。

「やっとな時間が取れたっていうのに……」と彼がぼそぼそとグチっている。

何でも社長である父親から緊急の呼び出しがあったのだという。彼には絶対に逆らえない相手だった。

「仕方ないじゃない。社長じきじきの呼び出しなんでしょう？　ここにはいつでも来られるし、お楽しみはまたにして、今日は戻った方がいいわ」

何とか落ち着きを取り戻した麻奈美は、彼を慰めながら、「急いだ方がいいわ」と勧めた。

大きな取引が、クライアントの一方的な都合で変更になりそうなので、その善後策を練りたいという、純粋に仕事オンリーの話らしい。もしか自分の事が話題に上ったのかと心配した麻奈美は、ほっと胸を撫で下ろしていた。

「この家。気に入らない所があったら後で教えてね」そう言って、麻奈美は肩を落とす太田を送り出した。「ああ」とまるで気のない返事をしながら、彼がバイバイと手を振った。

そのあまりに寂しそうな後ろ姿に、麻奈美の胸がきゅんと疼いた。ああ、やっぱり私も彼の事が好きなんだな……。そう思った麻奈美は、いつの間にかサンダルを突っ掛けると、玄関を飛び出していた。

追い付いた彼に飛び掛かるように抱き付いた麻奈美は、そのまま唇に唇を押し当てていた。

「なるべく早く来てくれたら嬉しいな」

幾分元気になったように感じる彼にティッシュを渡し、唇に着いた口紅を落とすように言くと、麻奈美は、車に乗り込んだ彼が見えなくなるまで、手を振って見送った。

「まあ君、さっちゃん、えみちゃん、どこ？」

たたた、と複数の足音が近付てきたと思うと、賑やかに声を上げ

ながら、何本もの腕が麻奈美の身体に纏わり付いてきた。

「もう。奥の部屋から出て来ちゃダメだってあれ程言ったじゃないの」

めっ、と睨んでも全く素知らぬ顔で三人はじゃれ合っている。声を出さなかったから気付かれなかった物の、本当にアブナイ所だった。初日からこれでは、先が思いやられる。

恵美がかわいいくしゃみをひとつして、麻奈美は子供たちが裸だった事に思い至った。

「ごめんね。寒くなかった？ もう服を着ていいから」

実は寢室の奥にはもうひとつ、隠し部屋のようになっている洋間があった。3人の背中を押しながら、子供たちと一緒にその部屋に入った麻奈美は、畳んであった服を順番に着せていく。

「あの男の人、どう思った？」

麻奈美が恵美に訊いてみると、「うーん。優柔不断そうだった」と鋭い答えが返ってきた。

一体どこでそんな言葉を覚えたんだか……。

「週に1回くらいここに来るから、その時だけ大人しくしてね」

苦笑しながら、麻奈美は子供達の頭を撫でた。

一応、独身、バツなしって事になっているのだから、三人も子供がいてはマズい事になる。

彼は、「引越しの手伝いに行くよ」と言ってくれたけど、丁重にお断り願った。そんな事をされては、一瞬ですべてがバレてしまう。

部屋を次々と飛び出していく子供達を見送りながら、万一に備えて服を脱がせておいたのは正解だったな、と美奈子は思っていた。彼がこの事を知ったらどう出るか、正直美奈子には分からなかった。案外すんなり受け入れてくれるかもしれないが、彼を失いたくなかったし、待望の家が手に入ったのに、すぐに出ていくような羽目にもなりたくなかった。

寝室へ戻った美奈子は、外を眺めながら、彼が透明な壁をずいぶん気にしていた事を思い出した。

海に見える面を透明な材質に変えたのは、純粹に風景を楽しみたかったからだが、お風呂はまだ小さい子供達が見えやすくする為の工夫だった。

私たちの身体は透明なのだから、裸になっしまえば見えなくなる。美奈子には、彼がどうして壁が透明な事にそれ程拘るのか、よく分からなかった。

着ている物を脱いでしまえば、何をしているかなんて分からないのに……。

「ねえ？」

ひとり美奈子にしがみ付いていた真琴は、何を言われているのか分からず、きよんとしている。

「ああっ、ケーキだ！」

リビングで上がった恵美の声に、真琴が美奈子を置いて行ってしまった。彼が買ってきてくれたお土産が、見付かってしまったようだ。

やれやれ……。縦横無尽に家の中を走り回る子供達に、大人しくしているというのが無理なのかもしれない。

この家にはそんなに長く居られないかもしれない……。麻奈美は二つしかないケーキをどうやって分けようか考えながら、そつと溜息を吐いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1473t/>

クリスタルな私たち

2011年8月1日03時25分発行